大学改革に資する技術系職員のキャリア形成について

安原栄子（静岡大学技術部）・佐藤龍子（静岡大学大学院教育学研究科附属学習科学研究教育センター）

はじめに

国立大学の法人化後、旧来教室配属で属人だった技術系職員が全学組織となりつつあり、静岡大学でも平成24年に技術部が発足したが、従来業務や管理体制に因み人々に課題を抱えている。こうした中、著者らが若手技術職員を中心とした自主的なSD研修会を立ち上げた。事務系職員のSDは数多く報告されているが、技術系は極めて少ない。

SD研修会を継続的に行うと同時に、全国の国立大学における技術系職員研修を実施したところ、現状の技術系職員の課題が浮かび上がった。近年の大学改革の中で、技術系職員に求められるスキルや質が変化している。本稿では、大学が技術系職員に求める職員像や技術系職員のキャリア形成について考察し、本年度静岡大学で実施した技術系職員の事務職研修について報告する。

１．調査から見た課題
今後の技術系職員に実効性のあるSD活動を推進するための根拠となる客観的知見を得、今後解決すべき課題を明らかにするため、平成25年度、国立大学の技術系職員に関する調査を行った1)。

結果からは、将来に向け変化の必要性を感じている技術系職員は存在するが全体的な意識統一に至っていない状況がわかった。問題点として大きく以下の事柄が挙げられる。

a)大学職員であることを意識する機会がない　b)技術系職員の将来、キャリアパスを考える機会がない　c)技術系職員をより多く国立大学法人を含む社会の現状や動きを知る機会がない　d)職能経路をしくい　e)事務組織と根本的に組織構成が異なる

２．技術系職員に求められる大学職員像
これからの技術系職員に求められるものの、より広い視野を持ち、「大学、教育研究、社会貢献」を考えるマクロ視点や、技術力のみに固執せず広く物事を受け入れる柔軟性だと考えられる。かつての技術系職員は高い専門性を有することがその存在意義だったが、大学改革の中で求められる職員像からは逸れてしまう傾向にある。今後は高い専門性に加え大学職員力という２本の足を持つパイ型人材を目指していかなければならない。

そのためには、職員力向上や汎用能力を高める継続的な研修が必須である。しかし、これまでの研修会やその他の取り組みを通じ、ソフトスキルを学ぶ研修は一部の技術系職員には「どれも同じようなもの」に見えてしまうことがわかった。技術系職員が技術研修のように完成形が明確な研修に慣れていることや、ソフトスキルを学ぶ必要性を十分に認識していないことが考えられる。認識を一朝一夕で変えることは困難であるが、着実に継続的研修を続ける事が重要である。
3. 技術系職員のキャリア形成

大学の教育研究力向上のためには教員がより教育研究に専念できる環境を整える必要があるが、残念ながら現状は異なる。予算や人材資源は限られる中、よりよい環境構築のためには職員が積極的に大学運営に携わる必要があり、これは事務系職員のみならず、技術系職員にとっても然りである。現在の技術系職員に明確なキャリアパスが存在しないのとは、技術力だけに重点を置いているからである。今後大学に貢献しうる人材となるには、技術力に加え大学運営に関心の能力が必要であることを十分認識しキャリアを形成するとともに、それらを支える体制が必要である。技術系職員のキャリアパスとして、研究者から経営や運営に直接関与するRA（Research Administrator）としての可能性を考えられるが、さらに事務職を経験し大学運営を学ぶ、「技術職→事務職→技術職」というケースも考えられる。事務系職員が技術職に就くのは困難だが、技術系職員が事務職を行うのは可能である。そこで静岡大学では、技術系職員が事務職組織で研修をする試みを行った。

4. 事務職研修

平成26年度6月〜8月の3ヶ月間、著者の1人である遠山（当時技術部所属）が、事務職組織に入り大学運営の流れを学ぶ「技術部若手マネジメント研修」に従事した。前述の調査でこのような取り組みを実施している大学はなかったため、本研修は全国初と考えられる。遠山は期間中、役員会や経営協議会等の大学運営上係る委員会を所掌する総務部総務課に籍を置いていた。そこで、学長の事務部長が出席する会議等のための資料作成や会議への参加、国からの大学運営に係る通達資料の闇読といった総務課での業務にて、Ustreamによる学内中継、アクティブラーニング型研修でのiPad等使用のための技術補佐など、自身の技術を活かした業務を担当した。

一介の技術職員では経験することのない業務を行ったことで、大学全体、さらには日本の大学へと俯瞰的な視点を養うことができた。国立大学法人として生き残りをかけて取り組むべき本学の課題と、技術職員としての自身の日常業務を関連付けて捉える機会となった。こうした研修により技術系職員の課題も見えた、今後一層ソフトスキルを技術職員全員が学ぶ必要性の認識に繋がった。

5. まとめ

大学改革が進む中、技術系職員も大学運営に関する知識を持ち、積極的に関わっていくことが必要となっている。広い視野を持ち職員力を向上させることで、大学でいまま何が始こり、どのような方向に進む、自分たちに何を求められているのかを把握し、大学や社会の教育研究のニーズを正しく汲み取ることができる。今後も技術研修のみでなく様々な研修やOJTを積み重ね、技術系職員のキャリア形成について試行錯誤しながら実践していきたい。

参考文献
1) 安原裕子、佐藤図子、遠山純矢香（2014）全国技術系職員調査から考察する技術職員のSD活動、大学教育学会第36回大会発表要旨収録、150-151